

宮城県食育推進会議における委員意見への対応状況

対応済, 今後検討, 対応困難

項目	各委員からの意見等	対応状況
全体	宮城らしい、他県と比べての独自性を出した計画作成が必要 テーマ設定は、全ライフステージに関わるものが望ましい。 設定したテーマを推進するための取組を実施してほしい。	本県の状況を考慮した上で、重点的に取り組む2つのテーマ(行動目標)を設定 食育推進の具体的な施策を検討する際の参考とする。
教育機関	家庭での食育が疎かになってきている状況では、給食を食育の場として活用していくことが大切 栄養教諭の配置や研修の充実が望まれる。 教育機関は家庭の食育をどのように支援できるかを考えてほしい。 保護者が給食を通して食育を勉強する機会があるといい。	「11ライフステージに応じた食育の取組」の中で、学校給食を通した食育について記載するとともに、「13 食育の推進体制と関係者の役割」で、教育関係者の役割として記載 「11ライフステージに応じた食育の取組」の学童期に県の主な取組として記載。県では栄養教諭の研修事業を実施中 「11ライフステージに応じた食育の取組」の乳幼児期・学童期に家庭の食育を各機関の連携により補完する旨、記載 食育推進の具体的な施策を検討する際の参考とする。
体験	親子で農業などを体験することで、新鮮な食材のおいしさが分かる。 高齢者から若年者へ料理などを体験を通じて教える機会が欲しい。高齢者には教える楽しみもある。 体験は、生産者が消費者に直接PRできる機会でもある。 生産者と消費者が交流できる取組を増やしていくことができないか。	重点施策2に「体験を通じた食育の推進」の項目を設け、農業体験等について記載 具体的には、施策を検討する際の参考とする 重点施策3の「地産地消の推進」の中で、生産者と消費者の交流推進について記載 具体的には施策検討の際の参考とする。
地産地消	宮城の食材を学ぶ視点があるといい。地域で生産される食材やその旬についてなど。 食べものに関する感謝の気持ちが薄れている。学童期にも感謝する心について位置づけてほしい。 日本人には、米を主食とした日本型食生活が適している。 地域で生産されるものの良さを地域の人に理解してもらうことに生産者が取り組んでいくことが地域食材を広めるには大切 店舗など、購入する場面で地域食材の取り入れが進む取組がほしい。 地産地消や生産者と消費者の交流をコーディネートできる人材の養成や人材リスト、消費者の受け入れ可能な生産者情報のリストがあるといい。	食材の理解については、「8食育推進の基本方向」に位置づけるとともに、重点施策3「食材王国みやぎの理解と継承」で重点施策として設定 「11ライフステージに応じた食育の取組」のジュニア期「家庭に期待される役割」において、食べものに感謝する心を伝えることを記載 重点施策1に「日本型食生活の実践促進」の項目を追加 「13食育の推進体制と関係者の役割」において、生産者等の役割として、地域食材の情報提供について記載 食育推進の具体的な施策を検討する際の参考とする。 食育推進の具体的な施策を検討する際の参考とする。
健康増進	年齢とともに自らが適切な食生活を実践していくようにしていくことが必要 朝食の欠食、睡眠不足等生活習慣が乱れているので、家庭でのしつけが大切 子どもの頃に肥満になったまま、成人してもやせられない人もいる。子どもの肥満防止は重要である。肥満の子どもとそれ以外の子どもへの取組は分けて考える必要がある。 肥満傾向には、運動習慣や生活習慣など、様々な要素が関係している。 第1期プランで達成困難となっている子どもの朝食欠食には、今後も重点的に取り組まなければならない。 食生活が健康に影響することについて周知していく必要がある。 地域と連携するなら、学校や職場の食堂が栄養管理を行えるような働きかけをする取組があるといい。	「11ライフステージに応じた食育の取組」で、世代に応じた特徴を踏まえた食育について記載。自らが適切な食生活を営むことについては、基本方向1で記載 「重点施策1」で「子どもの生活リズム」向上として基本的な生活習慣の定着について記載するとともに、「11ライフステージに応じた食育の取組」でジュニア期の「家庭に期待される取組」として記載 具体的な施策を検討する際の参考とする。 具体的な施策を検討する際の参考とする。 「子どもの朝食欠食」は、目標指標の一つとして継続して設定し、取り組んでいく。 「重点施策1 食育を通した健康づくり」の中で、食に関する知識の普及啓発について記載 具体的な施策を検討する際の参考とする。
ライフステージ	ジュニア期のライフステージの特性について、地域食材を取り入れることと関連する記述が弱い。 乳幼児期の特性にある「食を営む力」という言葉が分かりづらい。授乳については、「精神的な安定感」よりも「愛着」が通常使われると思う。 良い姿勢で食べることが噛み合わせには重要である。学童期の食事マナーに「姿勢」という言葉を追加してほしい。 乳幼児や学童の「調理技術」について、もっと適切な文言に訂正を。 乳幼児期にアレルギー等、個別の疾患への配慮が必要である。 思春期の「生活習慣の変化に合わせ、食生活リズムの再構築を行う」が分かりにくい。 青年期は子育て世代であることを強調し、青年期にある人々の家庭における食育の役割を具体的に掲げることが必要 青年期の人たちが、壮年期・高齢期の人から学ぶ機会があると良い。 高齢者世帯の食について、低栄養などが懸念される。高齢期の食育についても配慮する必要がある。 すべてのライフステージに関わる事項について、各ライフステージでの取組内容を記載するに当たり、わかりやすく表現を工夫してほしい。	ジュニア期の特徴の説明として「食材や食文化」への理解・関心についての記載を追加 「食を営む力」については、説明を追加。授乳による「精神的な安定感」は「愛着」に修正 学童期の「取組の方向性」に「姿勢」についての記述を追加 乳幼児期では「食事の準備等」、学童期では「日常の食事を準備できる力」に修正 乳幼児期の特徴の説明において、「個人差に配慮した」という文言を記載して対応 取組の方向性を「自らの生活習慣に合った食生活リズムをつくる」に修正 取組の方向性で、家庭における子どもへの食育について記載のほか、青年期の特徴として子育てを担う世代であることを追加記載 具体的な施策を検討する際の参考とする。 高齢期の特徴の中で、低栄養への懸念と高齢者の食生活を支える体制の必要性を記載 重複する事項については、わかりやすく表記するよう表の形で記載
成果・目標	子どもの食べる意欲、食行動の実践の経過、共食の状況を見られないか。 保育所の給食でも地場産品の利用品目数を出すことはできないか。 食料自給率の向上と、地域食材を取り入れるという食育の観点を連携させていけないか。 地産地消の日をより進めるような県産食材購入増加を目標を設定することも食育につながるのではないか。	参考数値として把握が可能。(県児童生徒の健康実態調査) データの集計が困難であり、指標の設定は難しい。 地域食材の消費と食料自給率を関連づけるのは難しい。 地産地消の日は購入量等の数値を目標としておらず、指標化は難しい。